

【個人研究発表3】

公正性を担保するための「コンテキスト（文脈）による入学者選抜」の妥当性について —社会的多様性・流動性の確保か、学術的水準の維持か—

沖 清豪（早稲田大学）

英国における大学入学者選抜は、伝統的に GEC A レベル試験の結果に基づいて合否が決定されてきた。一方で、1993 年の UCAS 創設以後、高等教育機関への進学率向上や進学のための公正性や多様な進学者の確保を目的として選抜制度や資格試験制度の改革が図られてきた。特に高等教育の機会が社会階層間で異なり、職業選択や次世代の教育機会に影響が生じているという認識や知見に基づいて、社会経済的に不利な状況に置かれている若者、A レベル試験を受験していないものの職業資格や GCSE 試験の成績を有している者、あるいは高等教育の機会を得てこなかった社会人層に対して新たな高等教育の機会を拡大するための方策がとられてきた。

その中で、近年改めて政策課題となってきたのが「コンテキストによる入学者選抜」(contextual admissions, CA)と呼ばれる選抜方式である。このコンテキスト(context)は文脈・状況と訳しうるもので、CA は具体的には志願者が有する多様な背景に注目し、Fair Access (公正な高等教育機会の提供) 策の一環として、個々の大学において選抜試験の過程において何らかの配慮を行うという制度である。学生局(OfS)による Access and Participation Plan 政策のもと、政策的にも選抜性の高い大学においても到達目標を設定した CA の導入が進められてきた。

この配慮に基づく合格判定 (contextual offer) にはいくつかの方法が想定されており、特に論争的となっているのが、事前に公表されている A レベル試験で要求されている成績水準よりも低い水準の成績でも合格を認める「成績条件の引き下げ」、および A レベル試験の結果の是非を問わずに合格をみとめる無条件合格(unconditional offer)である。「成績条件の引き下げ」は選抜性の高い大学でも実施されていることもあり、現在でも賛否が分かれている制度となっている。本研究はこの賛否について整理し、CA 制度で何が目指され、何が問題とされているのか、その議論の背景は何かについて検討する。

導入推進派は Boliver, V. (2021) 等で示された能力主義的な機会の公正モデル(meritocratic equity of opportunity model)に基づいて、CA を積極的に導入してきている。すでに導入した大学・プログラムでも入学者の社会的背景の多様化に寄与しているという報告があり、学生局も複数の研究成果に基づき、CA の入学者と通常ルートの入学者との間で学位取得等について大きな差はなく、機会の公正性に CA が寄与しているとの立場をとっている(OfS 2018, 2020)。

一方で、CA による成績条件の引き下げや無条件合格の導入に批判的な意見も少なくない。バース大学では無条件合格制度を導入しない理由として、A レベル試験がキャリア最後の公的学力試験であり、大学卒業後の就職活動においても企業が学生の能力を評価するにあたり、A レベル試験の結果を参照する点がある点を挙げている(Nicholson, M. 2019)。また、政策シンクタンクの Policy Exchange は、そもそも大学へのアクセスが不公正であるという主張の根拠が不十分で(Mansfield, I. 2020)、無条件合格の導入によって大学進学を希望する学生の学習への動機づけやシックス・フォーム段階の教育の質が低下しており、社会人学生がすでに入学条件を満たしていると判断できる場合を除き、無条件合格を実施すべきではないと主張している(Williams, J. 2019)。

こうした議論には歴史的な社会格差是正の重要な手段として高等教育進学が重視されていること、特に社会の多様化が進む中で入学者選抜制度の公平・公正性が重視されていること、一方で A レベル試験が有する多様な機能を重視し、高等教育の水準の維持や選抜制度の平等性を重視すべきという意見が根強くあることが伺われる。

※ 本研究は JSPS 科研費 JP23K02118, JP20K02572 の助成を受けたものです。